歌壇

桜井　登世子　選

この角を曲れば今も逢へさうな往診帰りの下駄ばきの父
向　丘　三宅　あき子

万緑の公園工事半ばにして重機はみんな被災地に行き
湯　島　山添　昭子

身に余る五キロの米を米びつに家事もする我われを愛しむ
西　片　松林　利枝

ボランティア陸前高田へ出向く吾娘（あこ）無事の帰宅を乞（こ）い願いおり
本駒込　鈴木　たまき

被災地の父母の墓参を果たしたり倒れし石にも草の花咲き
湯　島　山添　昭子

一人子の義父の遺骨は空の箱バシーの海に眠ると聞きぬ
水　道　高木　マリ

紫陽花は彩（いろ）も形もとりどりに登山電車の走風に揺れ
千駄木　伊藤　恵津子

飛び石に両手をついて通せんぼ五月雨の庭に蛙にぎはふ
千駄木　石井　禮子

ゲツツイのタンゴ聴きつつ夕暮れの窓辺に倚（よ）りて来（こ）しかた想う
千　石　小出　風沙子

母逝きて木槿（むくげ）の花の咲きにけりほんのり紅く微笑みて見ゆ
水　道　菅井　茂子

俳壇

松澤　雅世　選

蠖蠖（まくなぎ）や払いはらいて一人言　　千駄木　石井　禮子

山門を入る忽（たちま）ちの蟬しぐれ　　向丘　荒田　栄子

凌霄（のうぜん）の彩活きくと日暮どき　　大塚　荒井　ヨシ子

麦めしを炊いて八月六日かな　　小日向　木下　喜太郎

門火焚く俄（にわか）に影の老ひし人　　白山　釼持　四郎

油照いのちの炎燃やしつつ　　小石川　後藤　伝一郎

鎌倉の大仏黙（もだ）す大暑かな　　向丘　武田　時夫

短夜やシェークスピアの読み残し　　本郷　田中　靖三

節電や昭和に戻り夕涼み　　水道　髙木　敏之

痩我慢して夏痩せの真只中　　向丘　三宅　あき子